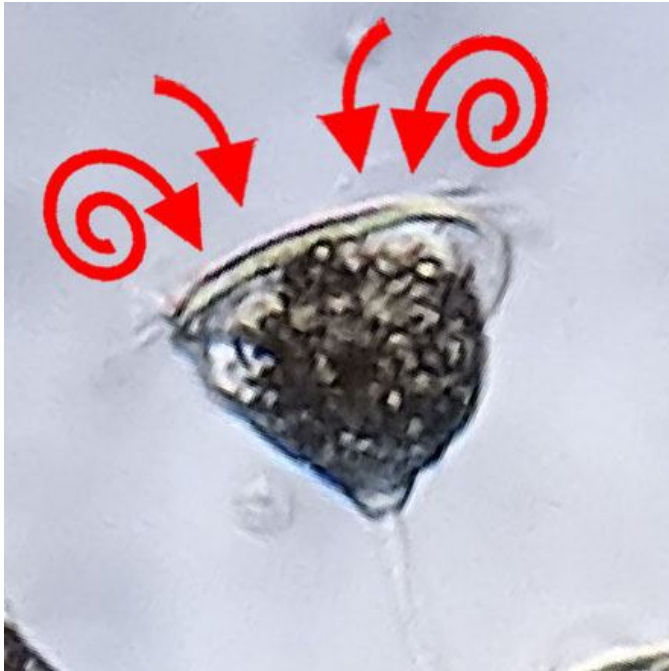


「原生動物を驚かす(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



ツリガネムシは単細胞動物ながらも、顕微鏡での観察対象としては実に面白い生き物だ。「釣鐘」の口の部分(つまり釣鐘の底)をよく観察すると、渦のような水流があるのがわかる。これは開口部にある繊毛が作り出しているもので、この水流でより小さなプランクトン(たとえばイカダモ)を摂取している。



枝の部分も、よく見ると、ばねのように縮んでいる時があることに気づく。



通常の状態のツリガネムシは、何匹かの個体が、枝のようなものを一杯に伸ばして、食物を求めてフラフラしている。ところが、何かの刺激(たとえば振動)を感じると、一瞬でこの枝のようなものが縮む現象が見られる。一人が顕微鏡を覗いて、1人が顕微鏡の台座の部分を軽く叩くと、この現象は意外と簡単に観察することができる。



これが、刺激(振動)を与えた直後のツリガネムシである。ほとんど一瞬で縮んだ。しばらくするとまたもとの長さに戻るなので、この「実験」は何度でもできる。顕微鏡下ではさまざまなプランクトンが見られるが、「原生動物を驚かす」ことができるのは、ツリガネムシだけだろう。ごく普通に見られるプランクトンなので、是非驚かしてみしてほしい。